

「そして祈る」

ダニエル書 10 : 1 - 3

October.25.2020

ダニエル 10 : 1 - 3 (パワポ)

### Preface

神に導かれている人生、なぜこうも妨害が多いのだろうか？とってしまうことがあります。

病という身体的な妨害、お金という経済的な妨害、人間関係による人からの妨害、生まれてくるところを選ぶことが出来ないという先天的な妨害、なぜこうもこんがらがってしまうんだらうかと思うような環境的妨害、突発的な事故による妨害、または、敵だと思われる存在や事柄からの妨害と、

神に導かれている人生であるにもかかわらず、変わりなく、終わりがあればいいなあと思うほどに、終わることなく続く妨害を、人生の現場で経験しますと、何なんだとってしまうことがあります。

特に、「このことだけは、神様の導きだとはっきり感じて選んだ道だし、神の導きによって開かれた道だ。」と進んだけれども、想像を超える妨害が立ちふさがった時、「何なんだ！？」とってしまういます。

「まあ、人の人生どこに進んでも、ある程度の苦しみや困難があることは分かっているつもりだし、まあそれなりの覚悟は出来ているけれども、神様これはないんじゃないですか？！」という場面に直面することがあります。

今日の聖書箇所のだニエルは、今まさに、このような場面に直面しています。

### Part One

滅びることなんかないと思われたバビロン帝国を打ち倒し、中東世界の統一を果たしたペルシアの王キュロスが、BC 538年に、勅令を出しました。

バビロン捕囚として捕まってきたイスラエルの民の故郷エルサレムへの帰還と、主なる神様を礼拝する神殿建築とエルサレムの再建を命じ、それにかかる費用まで与えるという破格の待遇で、イスラエルの民たちに回復の機会を与えます。

しかもこれは、キュロスの一時の思いつきによって成されたものではなく、聖書の言葉に基づいた神の約束の成就であることまで、確認できました。

さらには、この勅令を出したキュロス王は、自らを神のような存在だと崇めるよう強要してもおかしくない立場にあるにもかかわらず、こんなことまで言い

ます。

### エズラ 1 : 2 - 4 (パワポ)

というほどに、いと高き唯一の天の神、主の存在を認め、その方に仕えるよう勧めてまでいます。

このキュロスの言葉をもって、キュロスの信仰告白だと取るには不十分だと学者たちは言ったりもしますが、信仰告白だと取ってもおかしくない内容だと思います。

まあいずれにしろ、強力な神の手が働き、御言葉が成就しているという事実に変わりはありません。

つまり、エルサレムへの帰還、神殿の再建築、イスラエルの復興は、人間たちの浅はかな思い付きで起こったことではなく、確実に神の導きによるものでありました。

そして、ダニエルも、この帰還事業が神の導きによるものであることをダニエル書 9 章で見ましたように、確信していました。

なのに、なのにです。

この帰還事業が開始して 2 年ちょっとが経った頃、知らせ聞く帰還事業の進捗状況は、芳しいものではありませんでした。

始めに読みましたダニエル書 10 : 1 の“ペルシアの王キュロスの第三年”とは、まさに、帰還事業が始まって 2 年が経過して 3 年目に入った頃ということです。

思いもよらぬサマリア人たちの妨害が入り、工事が頓挫してしまっているかのような状態だということを、ダニエルは伝え聞くわけです。

その妨害工作について書いてある箇所を見てみましょう。

### エズラ 4 : 4 - 7、23 - 24 (パワポ)

帰還した民たちは、エルサレムの再建活動を、サマリア人たちを中心とした人々から脅され、その土地の権力者を買収までして反対され、さらには、ペルシア王国へのロビー活動までされながら、妨害をされました。

ここでの脅しや反対は、プラカードを持ってデモ行進をするようなものではなく、今で言う、軍事力の伴うテロのようなものだったと思われます。

当然ながら、対抗するだけの軍事力もなかった帰還の民たちにしてみれば、どうすることも出来ない手詰まりの奈落の底に落とされたような、期待と希望に胸膨らませていた思いがすべて萎んでしまったような状態です。

神によって選ばれた民が、捕囚の身分から70年ぶりに解放されて、神の約束の地に帰還し、神を礼拝するために神殿を建築し、神の都エルサレムを再建しようと神の導きによって始まった帰還事業が、棚上げ状態で、民たちも自暴自棄のような状態になってしまっていることを聞き、

正に、「何なんですか、神様?!」という心境に陥っただろうダニエルが、3週間の断食祈禱をしているのが、今日の聖書箇所背景なんです。

そして、このダニエルの断食祈禱を、聖書は何と記しているかと言いますと、

### ダニエル10：2 (パワポ)

と言います。

喪に服す、つまり、死と同然のような悲しみ、思い、痛みの中にあり、食が喉を通らない、しかも3週間も食が喉を通らないわけですから、これ以上ないような悲痛に臥していたことが分かります。

先週見ましたように、ここでのダニエルは90歳という高齢です。しかも、人も羨むような権力と財力を手にして、何も惜しいものなど無いと思われるダニエルが、死んでもおかしくないような3週間の断食祈禱をしているわけです。

尋常なことではありません。

ダニエルにしてみれば、正に緊急事態です。

そして、祈るんです。

やっぱり、祈るんです。

とことん、祈るんです。

祈ることしか出来ないから祈るのではなく、祈ることこそ、祈りを待っておられる神様に訴えることこそ、唯一の真の解決だから祈るのです。

ダニエルには、祈ることこそ解決だという、確信がありました。

## Part Two

ここでひとつ湧いてくる疑問があります。

それは、「なぜダニエルは、3週間の断食祈禱をするほどに、待ちに待った帰還事業に参加せず、そのままペルシアに残っているのか?」ということです。

エズラ書2章を見てみますと、エルサレムに帰還した人々の数が、家系別に記録されているのですが、その帰還した人の数は、5万人に過ぎませんでした。

単純に5万人と言いますと多く感じますが、捕囚の民総勢数十万のうちの5万人は、ほんの一部に過ぎない人数でした。

せつかく、祖国、故郷に帰ることが出来、また国を建て上げることが出来る千載一遇の好機だと言うのに、帰った者はたった5万人に過ぎませんでした。

中東世界最強国バビロンでの生活は、捕囚生活ではありましたが、荒れ果てた祖国イスラエルとは比較にならないぐらいインフラが整っていたところでの生活でした。

また、70年も経てば、捕囚として捕まってきた第一世代は未だしも、捕囚先で生まれた2世3世は、言葉も忘れ、文化も違い、イスラエル人としてのアイデンティティーもあやふやになっていたことは確かだと思います。

移民大国アメリカやカナダに行きますと、このことが良く分かりますし、私自身、日本で戦中から生きざるを得なかった在日韓国人の一人としても、よく理解出来ます。

私がパスポートを作り、韓国領事館に行きますと、在日2世か3世の両親が、在日3世か4世の子供と一緒に、パスポートを作り、いらっしゃっている姿を見るのですが、

親も子も韓国語は出来ませんし、日本で生まれ育っていて、差別があるため普段は日本の通称名を使い、パスポートを作る時だけ、韓国語の本名を使わなければならないので、「分けわかんない。なんでこんなことしなくちゃいけないの？」と、時代に翻弄された出生と育った文化の錯綜に戸惑った子供が、両親に向かって言っている言葉を聞くと、こう怒りに似た変な気持ちと言いましょうか、心が締め付けられるような思いになります。

捕囚生活を70年間してきたイスラエルの民たちは、正直今更、イスラエルに帰ることなんか出来ないし、帰ったところでどうすればいいのかもわからなかったでしょう。

信仰面においても、聖書の神ではなく、バビロンやペルシアの宗教観に染まっていた人たちも多数いたと考えられます。

だから、ほとんどの人たちは、祖国に帰ることなんか考えられなかったのでしょう。もうそこは、祖国じゃないんです。

70年というある種の痛みの時間が、そうさせたわけです。

しかし、90歳近くの老人が、命を顧みないかのような3週間の断食祈禱をしていることから考えますと、

ダニエルは、間違いなく、明らかに帰還する人々の一員として、もしくは、モーセやヨシュアのような民を導くリーダーとして、帰りたかったはずですが、

でも、ペルシアに留まりました。

その理由は、聖書に明確に記されていないので、はっきりとはわかりません。

ただ、ダニエルのことですから、私利私欲や自分の思いだけで、ペルシアに留まったのではないということは確かだと思います。

では、なぜペルシアに留まったのか？

どんなことがあっても1日3度の祈りを欠かさず、本当に困ったときには、命さえも惜しくないと思われるほどの断食祈禱をするダニエルに、神様が、祈りのうちに、特別な使命を示してくださったからだと想像します。

どんな、使命か？

一つは、異邦の国ペルシアにあって、神様から託されている世の光、地の塩として、ペルシア帝国に聖なる影響力を及ぼし、主なる神の愛とその宣教の業を、生涯全うすること。

そして、もう一つは、エルサレムに戻らなかったイスラエルの民たちの総括的ケアと、その信仰復興に身を献げること。

このような特別な召命を受けたダニエルは、「主の御思いここにあり」と、残ったのでしょう。

ダニエルの人生の生き方は、とことん、主が私に何を望み、何を期待しておられるのか、そして、主にあって私に出来ることは何だろうか？というものでした。

### Part Three

そんなダニエルの人生を見ますと、何と意思通りに行かない人生なんだろうと、思えてしまいます。行きたくもない国に捕囚として行き、帰りたいた郷にも帰らず、または帰れない。

でも、本当に意思通りに行かない人生だったのでしょうか？

いや、もっと言いますと、意思通りに行く人生を生きることと、主にある意思通りに行かない人生を生きることのどちらが幸いなのでしょう？

もっと正確に言いますと、意思通りに行く人生なんて、この世にひとつもあり

ませんから、

思い通りにしたいと願ひ、自分が自分の人生の主人となって生きる人生と、  
思い通りにしたいと願う代わりに、主なる神様の思いに従って生きる人生、ど  
ちらが幸いなのでしょうか？

ダニエルは、神によって区別された、真の幸いのある、神の思いに従って生き  
る人生を選び取りました。

なぜなら、そこにこそ、まことの喜びがあり、無駄でない達成感があり、人間  
としての本当の成熟があり、朽ちることのない命を実感できるからです。

そして、何よりも、もうこれ以上、私という人が私の所有物ではなく、主のもの  
となったという平安があったからです。

これは不思議ですね。

所有することを目的、または美德とする風潮のこの世界にあつて、所有権を失  
い、しかも自分という存在の所有権を神の前に放棄できることに平安を覚えら  
れるのは、信仰者にしかわからない境地であり、聖霊の業としか言いようがあり  
ません。

### コリント人への手紙第一 6 : 19 - 20 (パウロ)

ダニエルは、この言葉を生きました。

そこが、たとえ獅子の穴であつたとしても、そこに主の御旨があるならば、そ  
こに行つて、生きました。

獅子の穴だからと言って、福音書に出てくる、どんな鎖や足かせをもつてして  
も縛ることの出来ない肉体的物理的自由がありながらも、魂が束縛されて生き  
た心地のしない、墓場で叫び続け、自分を傷つけることを辞めることの出来ない  
人のようではなく、

むしろ、鎖に繋がれ、牢屋の奥の奥に入れられるというこれ以上ない肉体的物  
理的束縛に置かれても、主を褒めたたえ、自分を牢屋に閉じ込め見張っている見  
張りの命まで気遣い、抱擁し、愛したパウロのような霊的自由がありました。

獅子の穴の中でも、霊的自由という、真の自由がありました。

世間一般は、獅子の穴に入れられたら終わりだと思いますが、もしそこが、主  
の御旨に適うところならば、主の下さる霊的自由を謳歌することが出来ます。

これが、ダニエルの生き方でした。

だから、ダニエルは、妨害にあって苦しんでいる民の知らせを聞いた時、祈ったのです。

妨害という苦しみが、ダニエルの祈るという霊的自由まで、疎外することは出来ませんでした。

むしろ、妨害という苦しみが大きいほど、与えられている霊的自由を大いに用いて祈りました。

肉体的物理的限界を遥かに超えた、霊的自由を阻害することは誰にも出来ません。

そして、その祈りが、天の御国を動かすのですが、このことについては、再来週以降見ていきたいと思っています。

### Conclusion

メッセージの冒頭で、「神に導かれている人生、なぜこうも妨害が多いのだろうか？とってしまうことがある。」と言いましたが、このことに関して、聖書は初っ端から、至って淡々と、一見すると冷たく感じるほどに、

エデンの園を追放された罪人である人間が営み、神の最後の審判を待つ罪な世界に、妨害のないところなんか無いし、それが世の常であると、言い切ってしまうます。

創世記3章を見ますと、罪人となった人間が、必然的に被ってしまった悲運を、7つの言葉で表します。

苦しみ、うめき、支配、のろい、茨とあざみ、汗を流して糧を得る、土のちりに帰る、等の言葉です。

つまり、罪人がつくった、罪ある世界で、罪人として生きていくことには、多種多様な妨害のように思える、痛み、面倒、厄介、トラブル、悲哀、わずらわしさ、ごたごた、波乱と災害が付きものになってしまったということです。

だからと言って、「ああ、そういうことか。まあ、もう決まったことなんだし、仕方ないか。」なんて割り切れるものではありません。

その中で、私たち人間は、もがき苦しみます。もちろん、喜びや楽しみだってあります。

でも、その喜びや楽しみでさえ、痛みや苦しみと表裏一体です。

美味しい食事でも食べ過ぎれば毒になりますし、体にいい運動も、一歩間違えれば大怪我の元ですし、愛する家族だって、突然、憎く思えてしまいます。

ダニエルとイスラエル民族にとっての帰還事業も、正に、表裏一体です。

祖国、民族の回復・復興という未だかつてない喜びに、予想だにできなかった妨害という痛みが、もれなく付いて来ました。

避けることが出来ません。もうこれは世の常ですから。

主イエス様が再臨され、この罪な世界が終局し、新しい天と新しい地が来るまで、この表裏一体の悲運は続きます。

ただし、主イエス様を救い主として受け入れ、救いに与った神の民たちにとって、この表裏一体の悲運は、将来、一切の痛みや苦しみから切り離された永遠の喜びを一時的だけれども、味わう機会になると同時に、

神に祈ることが出来るという特権を用いた霊的自由を噛み締め、

神が試練さえも用いて、キリストに似た者へと造り変えてくださっているという真の成熟を実感する、恵みとなります。

だから、ダニエルは今日も祈るのです。

祈りの先にある恵みを覚えて、祈るのです。

### ペテロの手紙第一 1 : 6 - 7 (パウロ)

これが、キリスト者の生きる理由であり、ダニエルが期待して祈れた動機です。

妨害という試練は、キリスト者にとって、精錬であり、実りを得させていただく、前段階です。

妨害が、私たちが潰すことは出来ません。

むしろ、それを通して、称賛と栄光と誉れに与るのです。

こんな福音、この世界のどこにありますか？

この福音に生きましょう。

そして、ここに福音があることを、世に示していきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ペテロの手紙第一 1 : 6 - 7